

## きのこのゆめ あしたのゆめ

秋も深まったとある土曜の夕方。学校から帰ったわたしはいつものように、かおると一緒にほうきを動かしていた。

大きな大きな、おおぞらの樹。張り出した枝葉に見守られながら、いつもの赤と白の服——巫女服、と咲が言っていたその服を着て、ほこらと社務所の周りをゆっくりまわっていく。

シャツ、シャツ、ほうきを掃く音の調子もいつも通り。はらりと舞う落ち葉に邪魔されることさえ、いい休符に思えるくらい。

でも。さっきまで、もっと騒がしかったはずなのだけど？

「子供の声が聞こえなくなったわね、かおる　かおる？」

社務所の方に振り返ると、かおるが座ってる。わき

の縁側に腰掛けてひと休み。それも、いつもの光景。ただ、今日はひとつだけ違っていた。縁側に腰かけたかおるのひざに、ちいさな人影がひとつある。

「みのりちゃん？」

「しーっ。起きてしまっわ、みちる」

ひざの上に頭を載せたちいさな身体が、小さな息の音と一緒に動いていた。

「さっきまで、走り回って遊んでたのにね」

まあ、はじめてではないから、人間の子供はわりと普通にこうなる、とはわかるけど。最初に見たときは、かおるも私も、あやつり紐ひもでも切れたんじゃないかしら、ってびくびくしてたわ。

「他の子たちは？」

わたしが訊いたら、かおるはすっ、とふもとの方を指さした。みんな帰っちゃったのね。

みのりちゃんと一緒に遊んでいた子供たち　この場所も、すっかり遊び場になってしまったわ。

「咲と舞のほかによく来るのは、あの子たちくらいね」

3 きの中のゆめ あしたのゆめ

いつものことだから気にしてはいなかったのだけ

ど、いきなりいなくなると、かえって気になるものね。

「みちるが怒ったからでしょ。たばこ吸ってる人に」

「あたりまえよ。なに、あの煙は。ただ燃やすだけじゃない分、モエルンバより性質たちが悪いわ」

言った瞬間、かおるの目が鋭くなった。指が一本、口の前をふさいでいる。かおるの言葉について声が大きくなっちゃったわね。

「だからって、ほつきでふもとまで掃き転がした誰かさんも、すごいけど」

くすつ、と笑うかおるに、思わず顔がむくれてしまふ。しかたないじゃない、この山とこの樹と、なにより精霊たちを害する人は、許せないんだもの。「うわさされてたわね。このやまには、赤青の鬼がいる、って」

そう、人よりちからが強いこと、忘れちゃいけないわよね。わたしとかおるで、瞳がちょうど赤と青だから、ってことまでうわさになっちゃったんだもの。

でも、

「わたしが青鬼か やっぱり、泣かないといけな  
い？」

でも、かおるも気にしているのは空気でわかる。だから、

「泣くのは赤鬼よ。それに」

「それに？」

ひとつ息すって、わたしは言ってみた。

「鬼なら守れもするのだったら、それでもいいんじゃない？」

わたしの目線の先を追って、かおるもひとつ頷うなづいた。ひざの上で上下するお腹を見つめながら。

\*\*\*\*\*

ほつきを縁側のわきに置いて、わたしもかおるの隣に座った。ゆっくりとあたりが赤っぽくなるなかで、かおるのひざのみのりちゃんを見ているとい

ろいろ思い出してしまっな。

「最初は、和菓子を食べられる、って言って来てたのよね」

わたしたちが住んでいるこの社務所は、精霊たちがつくってくれたもの。なにもしないで過ごすことはできるのだけど、やっぱり、なにかしたいと思って、先月くらいから、和菓子をつくるようになったのよ。いまは咲のうちのパン屋さんで売ってもらっているのだけど。それを聞きつけた子どもたちが、和菓子をもらいに来たの。でも、

「ええ。でも、それはよくないから」

そつ。かおるが、ちゃんと買って食べなさい、って断っちゃったのよ。

「頑固ね」

「職人らしいでしょ？」

本当に。いまではすっかり、このほらの名物になってしまったわ。ここで売ったら、なんて言う人もいるけど、売る才能はないから断ってるくら

いだもの。

けれど、それが子どもたちに通じるとは思えない。つつきり、ケチとか言われるかと思ったのだけど

「みのりちゃんが言ってくれたのよね」

「ええ。作るの大変なんだから、ラクして持ってたちゃダメ！ですって」

そう言いながら、かおるがみのりちゃんの髪をすいている。

『公平』を知らないのはよくない——まえにかおるが言った言葉を、みのりちゃんはちゃんと実践してる。それは、とても嬉しいことだわ。わたしたちが、ここにいる証拠なのだから。

ここにいた、になるのかもしれないけれど。

わたしは少しだけかぶりをふって、縁側から立ち上がった。

「その様子じゃ、かおるはしばらく動けないわね。掃き掃除の残りは、わたしがやっておくわ」

「ん。おねがい、みちる」

5 きのうのゆめ あしたのゆめ

ほうきを持って立ち上がったわたしを、かおるの目が追いかけてきた。

これは別に不公平じゃない。わたしたちはいままでも、たぶんこれから、ふたりでひとりだから。

\*\*\*\*\*

「かおる、掃除終わったわ あら?。」

掃き掃除を終えてもどってきたわたしの前には、かおるのひざの上で眠ってるみのりちゃんの姿があった。

「まだ、眠ってるのね。」

もうそろそろ陽もかげってきて、暗くなっていくのに、まだ。

子供によくあることだとは聞いているけど、具合が悪いとかないわね ?

「なんの夢を見てるのかしらね——」

わたしの考えは、かおるの優しい声にかき消された。

「なんでもいいでしょ。この子は、夢を見られるのだから。」

わたしもかおるも、夢をあまり見ない。少なくとも、覚えているような夢は。そのへんも、人間とちよつと違うみたい

「咲は、パン屋さんだったかしら?。」

「ひえ?。」

いきなりだったので、へんな声が出てしまったわ。なんで咲が出てくるの?。

「ほら、将来のゆめ。」

おおぞらの樹をまっすぐ見ながら、かおるが言った。ああ、そつか。『夢』じゃなくて、『ゆめ』ね。

「そうね 舞が言ってたわ。自分ではただのお手伝い、って言ってるけど、だんだん本格的になってるって。」

「へえ。」

「ゆめは、もうひとつありそうだけど。」  
ちらつ、と目線を合わせて、わたしはかおると顔

き合った。

舞のお兄さんと よね。ふたりだけでも、その先を口にはしないけど。慣れちゃうと、つい当事者咲と舞にも言っちゃいそうだし、ね。

「舞は、画家さん？」

「絵を描く仕事がしたいのはたしかよ。でも、高校は美術科じゃなくて、普通科にするみたい」

わたしが言った言葉に、かおるが応えた。

もちろんそれは知っているけど。だって、ふたりで誘われたんだもの。

「わたしたちもいつしよ、でしょ？」

「そう、なのよね」

舞に言われた言葉から受けたのは、みんなと同じ高校に行きたい、という思い。とりあえず、高校までは、とは答えなければ。

「重荷にならないといいけど わりと、隠す方だ

し。注意はしといたほうがいいかもしれない」

「ええ。いざとなったら、咲をたきつけるわ」

言いながらぎゅっ、と手を握ったとたん、声が聞こえてきた。うーん、って寝起きのような声。みのりちゃんが、寝返りを打ったのね。

「どんなゆめをみるのかしら？」

「どんなゆめでも見られるわ。みのりちゃんは」

わたしと目を合わせて、ふふ、って笑つかおるが、少し寂しそうに見えた。

言わなかつた言葉はわかる。『でもわたしたちは』  
よね――

寝返りで横になったみのりちゃんのそばには、とても小さな影がいくつか。小さな子たちが、ちょこまかとうごきながら、わたしたちを見ている。

咲と舞にさえ見えない、この子――精霊たち。その姿を追いながら、わたしは立ち上がった。

「それじゃあ、夕食を作りに行ってくるわ」

そう言っつて社務所の奥に行こうとするわたしに、精霊たちが何人かついてきてた。

わたしは、ぱつ、と振り返って、

「いたずらしたら、カレー鍋つくるわよ?」

ひとこと言ったとたん、全員がおあるの方に逃げていく。苦手なのよねえ。カレー好きの咲にはとても言えないけど。

\*\*\*\*\*

「とりあえず、お鍋を仕込んできたわ まあ」

台所から戻ってきたわたしを迎えたのは、やっぱりみのりちゃんだった。

両手を上に伸ばしてこっちを向いて。でも、頭はおあるのお腹のあたりに載せて目をつむっている。

「これで、よく起きないものよねえ」

かおるが何をやってるのか、怒るべきなのかもしれない。でもわたしはむしろ、みのりちゃんの適応力に感心してしまっただわ。

「ええ。さすが、咲の妹だけのことはあるわね」

度胸の素質　なんて言ったら咲に怒られちゃうかもしれないけど。

「夕ご飯の鍋、火にかけてきたわ」

わたしはまた、かおるの隣に腰かけた。夕ご飯といつても、材料さえあれば、切ってお鍋に入れて火にかけてるだけの簡単なもの。そう、材料さえあれば。「そういえば、この間はスーパーに買い物行ってたわよね、かおる」

「ええ。いつものことですよ?」

食事の材料は精霊たちが持ってきてくれることが多いけど、お豆腐の精霊なんていないから、ある程度は買い物に行くのよね。でないと、お鍋がきのこだらけになっちゃうし。

でも、

「その姿で、よ」

わたしはかおるを指さして言った。紅と白のはっきりした巫女服を。

「ちょうど、洗う前だったから。新しいの着た

らもつたないし」

はあ

「洗い替えくらい、また作るわ。っていうか、そうじゃなくて。洋服着なさい、ってこと。この服は特別らしいから」

「いつもの服よ？」

「私たち、じゃなくて、見てるひとたちにとって、よ、咲や舞や、クラスの子たちまで普通にしているけど、町の商店街だとまだ指さされることもある。平然としているかおる見ると、わたしの方がヘンなのかともおもうけど、

「とりあえず、私はみのりちゃんが気にしなければいい」

かおるの基準は、これなのよ、ね。

「みのりちゃんだつて大きくなるわ」

ちよつと口ごもつたけれど、ひと息でわたしは言った。そう。大きく大きくなって、いずれわたしたちを追い越すのよ。

わたしたちの時間が、咲や舞よりゆっくりなのはわかつていた。それはもう、ふたりも理解してくれただけ。

「高校までは、いっしょに行くわ」

「そうね。高校までは、行きましょ」

でも、その先は？

次のひとことを、わたしが言えないでいたら、

「ゆっくり離れていく、べき、なのかも、しれない、わね」

低く、とぎれとぎれのかおるの言葉に、わたしは思わず目をつむつた。

ここで暮らしていて、よくわかること。わたしたちは、精霊たちに近づいている感じがする。なんとなく、だけ。

わたしたちにしか見えない精霊たち　咲や舞にさえ見えない精霊たち。わたしたちも、そうやっていくのかもしれない――

「そろそろ、お鍋を見に行った方がよくない、みちる?。」

いつもの声につながされて、わたしは目を開けた。かおるはさっきまでと同じように、眠っているみのりちゃんの頭をなでている。

「そうね。うつかりしていると、また精霊たちに味つけられちゃうわ。」

そう言っ立ち上がりながら、かおるの様子を追っていたわたしに、ひらひらと手が振られた。

「大丈夫。なでられるのは嬉しいことよ。まだなでていられるのだから。」

\*\*\*\*\*

お鍋の火をとめてフタをして、少しため息つきながら縁側に戻ってきたわたしを、二本の足が迎えてくれた。かおるの両肩から生えてる、足?。

「ええと、かお まってまって待ってっ!!」

思わず駆け寄って、頭を抱えたわ。だって、

「みのりちゃん、さかさになってるじゃない!。」

ひざに頭を載せて、両足をばんざいして。いっくらなんでも、

「だめ?。」

「だめ?じゃないっ!。まさかかおる、匂いか

いだりとかしてないわよ、ね?。」

さ、さすがに、そこまで疑いたくはないけど

「さあ?。」

「ちよつとおおっ!!!」

もうみのりちゃんが起きても構わない。いっぺん

怒鳴りつけてやらないと

「おーい」

と、息をついたところに声が響いた。

声の方を見たら、普段着の咲と舞が並んでやってきているわ。

「あ、やっぱり。みのりが帰ってこないからさ、きつ

と薫とこだと思っただよ。

にしても、ひどい寝相だよねえ。わが妹ながらさあ」

舞が、なんか言いたそうな顔してる。わたしはちょっと頭をさげて、言葉を止めてもらった。

「甘えちゃってるのね。薫さんに」

止めた言葉の代わりに、舞がそう言った。言葉がだいぶ柔らかくなっていて、ちょっとほっとするわ。

「実のお姉さんはここにインだけどねえ。お母さんなんか、携帯持たせたほうがいいんじゃないか、とか言ってるし。あたしときは心配してなかったんだけどなあ」

「咲は、どこにいてもちゃんと帰ってこれるから」

「まーい。それ、フォローになってないよ」

ふたりでぼんぼんとしゃべっていたかと思っただら、と舌を出した舞が、わたしたちの方に向き直って、

「かおるさん、　　いいかしら？」

このかおるの姿みても気遣きづかってくれるのが、舞のいいところよね。

わたしのとなりで頷いたかおるも、みのりちゃんを　　ちゃんと頭を上にして抱きかかえると、素直に咲にあずけたもの。

「もちろん。お菓子お菓子の家の魔女になるつもりはないわ」  
笑ってはいるけど、ついさっきまでの姿を見てみると、素直には受け取れないわね　　精霊の世界に連れて行かないように、見張みまつとかないといけないかも。

「そりゃあ、最近ふたりで和菓子作わがしってるけどさあ。  
お菓子お菓子の家にしちゃ和風すぎるって。ほら、みのり。  
行くよ」

「ん〜」

咲が気づいてないのが唯一の救いだわ　　そんなこと考えながら、みのりちゃんが咲の背中によじ登のぼっていくのを、わたしたちは見守みまもっていたのだけど、

「ん?」

登る途中で、その頭がくるつ、と振り返って、

「ばいばい」

「はい、バイバ あら?」

振られた手に、ふたりで振り返した手が、途中で止まった。

見てる目線が、違う

「わたしたちじゃ、ない??」

わたしは思わず、かおると目を合わせて頷いた。

まちがいない。みのりちゃんの目は、わたしたち

のとなりを見ているわ。もっと低いところ、もっと

小さいなにかを なにか?

「見え」

「てるの??」

わたしの足元で、たくさんバイバイが手を振っていた。精霊たちの、バイバイが。

そっか。たとえ消えても、見てくれるのね――

「それなら、まだしばらくがんばりましょうか」

わたしが言うと、かおるが手を振りながら応えた。

「ええ。この土地で、このままのわたしたちで」

――おしまい――